

科学研究費助成事業（基盤研究（S））事後評価

課題番号	19H05660	研究期間	令和元(2019)年度～ 令和5(2023)年度
研究課題名	翻訳規範とコンピテンスの可操作化を通じた翻訳プロセス・モデルと統合環境の構築	研究代表者 (所属・職) (令和6年3月現在)	影浦 峯 (東京大学・大学院教育学研究科 (教育学部)・教授)

【令和6(2024)年度 事後評価結果】

評価		評価基準
	A+	期待以上の成果があった
○	A	期待どおりの成果があった
	A-	一部十分ではなかったが、概ね期待どおりの成果があった
	B	十分ではなかったが一応の成果があった
	C	期待された成果が上がらなかった
<p>(研究の概要)</p> <p>本研究では、翻訳プロセスをアクターの行為とアイテムの操作として記述し、規範とコンピテンスに対応した翻訳プロセス・モデルを構築することを目的として、翻訳実務プロセスの明確化、メタ言語の設計と評価、翻訳プロセスの実装、統合的翻訳環境及び翻訳学習環境の構築と提供・評価などを計画している。</p>		
<p>(意見等)</p> <p>本研究は、2019年末に流行し始めた新型コロナウイルス感染症と2022年末に一般人が利用可能な生成AIが公開されたという二つの社会的・学術的に大きなインパクトを持つ5年間に実施されている。前者の社会情勢により、学会発表や国際活動の計画を大きく変更することを余儀なくされた部分がある。それにもかかわらず、本研究は2022年に翻訳プロセス・モデルの構築に関する編著書を出版し、関連分野の国際的な学術誌に書評が掲載されるといった世界的な注目をもって進められた点が評価できる。また、本研究は概念的な研究にとどまらず、技術開発・学習環境の整備、実証実験、データ構築と公開といった実証的な研究として多面的に展開し、諸外国の研究者との交流の場を積極的に設けてきた点が、学際的研究として意義がある。さらに、生成AI等の学術的かつ技術的進展により、人間による翻訳実務は様変わりし続けると考えられるが、本研究で得られた研究成果を土台とし、概念的かつ実証的に研究が行われることになるのは確実であり、今後の翻訳論と機械翻訳の融合のあり方に新しい展開を見いだすことが期待できる。</p>		